

PROFILE

Kuji:Nine

九字

マジックを作っているようで、
人の持っているものを見つけている。

—— この人、何者なんだろう？

マジック / 映像 / 音楽 / 舞台 / イベント / テクノロジー

臨兵闘者皆陣列在前

この人は、マジックを作っているようで、
実は「人の持っているもの」を見つけている。

この人は、マジックを作っているようで、実はずっと、**人の持っているもの**を見つけてきた。

マジシャンとして活動を始めたのは15歳。

ステージに立ち、観客を驚かせる。
それはもちろん面白かった。

けれど、いつからか興味は、
「どうやって驚かせるか」ではなくなっていくた。

誰かが持っているもの。
誰かが作ったもの。
何年もかけて積み上げてきた技術。
本人にとっては当たり前になっていること。

「これ、もっと面白くできるんじゃない？」

そこに目が向くようになった。



マジックから始まった。

Kuji:Nineにとって、マジックは「完成した技術」ではなかった。

むしろ、何かを生み出すための素材だった。

人を驚かせる。笑わせる。不思議にする。その場にいる人を参加させる。

そして、ときにはマジシャンがいなくても成立する。

テレビ。映画。ドラマ。コンサート。舞台。テーマパーク。
イベント。

マジックを持っていける場所は、思っていたよりずっと広がった。

だから、マジックそのものを磨き続けるだけではなく、「マジックを
使って、何ができるだろう」を考えるようになった。



フォーカスする。

この人には、昔から妙な癖がある。

誰かが「これが好きなんです」と話すと、

「なんで？」

「それで？」

「その何が面白いの？」

「もっとない？」

と聞いていく。

自分が知らない世界ほど、面白い。

その人にとっては当たり前のことの中に、本人すら気づいていない面白さが眠っていることがあるからだ。

それは、人に限らない。

商品でもいい。音楽でもいい。映画でもいい。スポーツでもいい。技術でもいい。趣味でもいい。

何かにフォーカスすると、そこには必ず、まだ見えていないものがある。

だから、その対象を見つける。

そして、掘る。

掘って、集めて、考えて、混ぜる。



どんな人にも「匠」がある。

Kuji:Nineが言う「匠」は、職人だけの話ではない。

商品を作っている人。楽器を弾く人。スケートボードをする人。映像を作る人。何かを研究している人。子どもだっていい。

その人が何気なく続けていること。

その人だけが知っていること。

その人の指先にしかない感覚。

その人が何年もかけて積み上げたもの。

どんな人にも、何かしらの「匠」がある。

問題は、それが本人には見えていないことが多いことだ。

だから、見つける。

そして、それを別の角度から照らしてみる。



04

もっと面白く、もっとすごく。

たとえば、ある会社が新しい商品を作ったとする。

開発者は何年も考えた。何度も失敗した。細部までこだわった。

それなのに発表会では、スクリーンに商品写真を映して、「こちらが
新商品です」で終わってしまう。

——それでは、もったいない。

その商品に込められた時間や情熱まで含めて、ひとつの体験にできないか。

突然現れる。思いもよらない場所から出てくる。音楽と組み合わせる。映像と組み合わせる。マジックにする。観客自身を巻き込む。

フォーカスしたものに、自分の持っている表現を浴びせる。

そうすると、同じものでも違って見える。

これが、Kuji: Nineのやってきたこと。



ひとりで作らない。

だから、いろんな人と組んできた。

マジシャンだけではなく、特殊メイク、衣装、アート、音楽、映像、舞台。

異なる才能を持った人間を集めて、一人では作れないものを作る。

Route13

KAGE6SHA

そこでもやっていたことは、結局同じだった。

違うものを混ぜる。

一人では出てこないものが、二人なら出てくる。

三人なら、もっと違うものになる。

だから、面白い。



臨兵闘者皆陣列在前



06

CHAPTER 06

陣

マジックは「増幅器」になる。

たとえば、自分が瞬間移動する。

「すごい」。

でも、もし自分が大好きなアーティストがやったら？

あるいは、ずっと応援している人がやったら？

驚きの大きさは、きっと変わる。

なぜなら人は、**その人自身に意味を感じているからだ。**

だから、マジックはマジシャンだけのものではない。

誰かの魅力を増幅することもできる。誰かを参加させることもできる。

観客を増やすのではなく、

主役を増やす。

そして、その瞬間と一緒に経験した人たちの間には、「思い出」が残る。

臨
兵
闘
者
皆
陣
列
在
前

右往左往してきた。

振り返ってみれば、ずいぶん寄り道もしてきた。

マジック。音楽。テレビ。映画。舞台。アーティスト。イベント。テーマパーク。

いろんな人と出会い、いろんな場所に行き、いろんなものを作ってきた。

一見すると、まとまりがない。

でも、本人にとっては、それほど不思議なことでもなかったのかもしれない。

面白そうなものがあれば、とりあえず近づいてみる。

知らなければ聞いてみる。

面白ければ混ぜてみる。

そして、「これ、もっと面白くならない？」と考える。

どうやら、それをずっと繰り返してきたらしい。



そして、今。

マジックから始まったこの考え方は、今ではマジックだけに収まらなくなっている。

AI。映像。音楽。新しいテクノロジー。

新しい道具が生まれるたびに、「これで何ができる？」と考える。

道具が変われば、表現も変わる。

だから、まだ試していないものがたくさんある。

現在は、新しいクリエイターとの活動 +ONE も始めている。

これまで出会ってきた人たち。これから出会う人たち。そして、まだ見つかっていない「何か」。

それらを組み合わせながら、次の表現を探している。





09

CHAPTER 09

前

この人と一緒にやると。

たぶん、Kuji:Nineに何かを見せると、少し面倒なことになる。

「それ、なんで？」

「誰が作ったの？」

「そこ、もっと面白くできない？」

「じゃあ、これと組み合わせたら？」

そんなことを言い出す。

でも、その先にあるのは、自分たちだけでは見えていなかったものかもしれない。

人でもいい。商品でもいい。作品でもいい。技術でもいい。

あなたが持っているものを、もう一度、一緒に見てみる。

そして、

もっと面白く。

もっとすごく。

そんなふうに、その人、そのモノ、その世界に新しい光を当てる。

それが、Kuji:Nineという人なのかもしれない。

これまでフォーカスしてきた、世界の断片。

順不同

ARASHI Mr.Children きゃりーぱみゅぱみゅ AKB48

氣志團 DJ OZMA Cero 水樹奈々 水木一郎 ゴールデンボンバー

JYJ ジェジュン GLAY Hey! Say! JUMP SKE48 菅田将暉 Chloe

Disney 007 Spider-Man 3 METAL GEAR

Death Stranding ONE PIECE 刀剣乱舞 陰陽師 GEAR

ガールズコレクション モニタリング ロンドンハーツ 24時間テレビ

今夜はナゾトレ アンビリバボー AKBINGO!

ミュージックステーション 紅白歌合戦 アジアンエース fake book

神業マジック50連発 13fakes コンフィデンスマンJP

アンサンブル・シンデレラ SUITS 外交官 黒田康作 素敵な金縛り

LIAR GAME バースデーワンダーランド きみと、波にのれたら

ナイトミュージアム

臨
兵
闘
者
皆
陣
列
在
前

X-MEN The Strain ビザハット Coca-Cola ソフトバンク ディズニーモバイル
NTTぷらら サブウェイ ウコンの力 トッキュウジャー ボクラ団義 ゴーストライダーズ
ワンドスタディ 嵐のワクワク学校 アラフェス セロ
タイ・ジャパンエキスポ 深圳 台北 GyaO ガールズコレクション
KOJIMA PRODUCTIONS キティちゃん アドベンチャー最遊記
Girls Collection Beijing Girls Collection Tokyo 国際フォーラム フジテレビ
TBS テレビ朝日 WOWOW KONAMI Mステスーパーライブ
Mステウルトラフェス ピラミッド 超マジシャンズリーグ
マジックのタネここで見せるかSP カスペ オールナイトハワイフジ
モニタリング 心霊列車 モニタリング 心霊バス
コンフィデンスマンJP スペシャル コンフィデンスマンJP 映画
007 スカイフォール 紅白歌合戦

臨
兵
闘
者
皆
陣
列
在
前

USJ：ハリーポッター

ディズニーランド

ディズニーシー



Kuji:Nine とは。

「Kuji」とは、九字を切る。

臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前

古くから、九つの文字を切ることで、自分の身に結界を張り、邪気を払い、心を整えるためのものとして知られている。

でも、Kuji:Nineが切りたいのは、魔を払うための九字だけではない。

臨
兵
闘
者
皆
陣
列
在
前



人。

モノ。

アイデア。

技術。

才能。

まだ見つかっていない面白さ。

そこに一本、線を引く。

フォーカスする。

そして、その線の内側にあるものを見つけ、自分の持っているものと混ぜ、まだ見たことのない形にしていく。

九字を切るように。

ひとつ、ひとつ、線を引く。

その先に、今まで見えていなかったものが現れる。

それが、Kuji:Nine。



KUJI:NINE — PROFILE / 仮FIX版 VER.0